

---

# 世界が終わる時 The last summer

蒼月 紡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界が終わる時 The last summer

### 【著者名】

蒼月 紡

N9697D

### 【あらすじ】

世界が滅びる。それが決まってしまった世界。そんな世界で無力な俺たちに何が出来るんだろう?純粹に世界を見つめ続け、歪んでしまった俺の世界。これはそんな俺と仲間との最後の夏の物語。

## プロローグ

世界が滅びる 。

そんなアニメや漫画でしか起こりえないようなことが起こつたら人々はいつたいどんな風に人生を過ごすのだろうか？絶望して、世界よりも先に終わりを選ぶのだろうか。それとも、最後まで生にしがみついて一分、一秒でも長く生きようとするのだろうか？

もしこの質問をされたらたぶん僕はこう答えるだろう。  
世界が終わる様をゆっくりと見物しているよ、と。

だつて世界に希望があるとは思えないんだもの。世界は闇に包まれているんだもの。

だから世界が滅びようが知ったことじやない。  
世界がどうなろうが僕には関係ない。

そんなことを考えていたからなのだろうか。  
僕は世界が滅びると知ったとき、絶望する人たちを見つめながら一人歪んだ笑みを浮かべていた……。

## プロローグ（後書き）

初めて書いてみました。  
なのでこれから文章がおかしいところなどが出でてくると思いますが、  
それらを指摘していただけると助かります。

## 一章 歪んだ日常

世界が滅びる　急にそんなニュースが流れていったいどの程度の人が信じるだらうか？

多分、大多数の人は信じない……たとえそれが眞実であろうと。何故か？　簡単なことだ。それは『人間』だから。

人間という生き物は自分の都合のいいことにはすぐ食いつくのに、都合の悪いことは蓋をしたり、見てないふりをする。……そんなことに意味はないのに。

そんなんだからきっと世界は　。

黒板の前にたつ教師の声はちょうど鳴り響いてきたチャイムに中断された。

教師はほんの一瞬だが自分の話を中断したチャイムにたいする不快感をあらわにする。しかしそれも刹那ほどのこと。すぐにいつも表情に戻る

「……今日はここまでだな。今言つたことはテストにだすからな。覚悟しておけよ？」

教師はおどけたようにそう言った。さつきまでの話し方からは想像のできない変わりようだ。しかし生徒はそれを当たり前のように受け入れ、冗談混じりの返答を返している。

学校なら普通に見られるような、普通の日常。

当たり前だけどとても大切なひととき。

だが、よく見れば教師の笑みにも生徒の笑みにも影があるということがわかる。まるで無理矢理笑つて何かを忘れようとしているようだ。

……歪んだ笑い方だな。

そう思いながら黒桐想人は苦笑した。あの時　世界が滅びると知ったときに自分が浮かべた笑みにどことなく似ている。

そんな笑いを見ているのが嫌になつて、笑い声を聞いているのも

つらくなつて耳をふさいだ。

逃げたつてどうにもならないのに。

「ねえ、大丈夫……？」

「……っ！？」

突然、後ろから声がして驚いた。多分、こんな状態の自分を見て心配でもしたんだろう。

「『』、ごめんさい。驚かすつもりは……」

振り向いた視線の先にいたのは美をつけても百人中九十人くらいは納得するだろ？と思われる、ぼややんとした雰囲気が特徴的な少女だった。

流れるような黒髪は肩の辺りまであり、制服によく合つている。胸の膨らみも一般よりも少しだけだがよく、丁度いいという感じだ。

だが、一番印象的なのは髪でもなく、もちろん胸でもなかつた。その少女の瞳だった。

日本人なら当たり前の黒。自分の瞳の色と同じはずの黒。別に珍しくも無い普通の色。

しかし想人はその黒から目を離せなくなつていた。  
その黒を見ているとなぜだか安心できる。まるで何かに包まれているような、そんな感じ。

それは例えるならば母親の抱擁に似ていたかも知れない。

彼女は確か、

「霧月さん。ちょっとといい？」

タイミングよく誰かがその少女 霧月雪華を呼んだ。

しかし彼女はまるで聞こえてないかのようにそこから動こうしない。

「向こうで呼んでるみたいだけど？」

「聞こえてます……けど……」

雪華は何かを言おうと口を開けるが、そこから言葉が出てくるはずだが、出てこない。

このままでは彼女も待っているクラスメイトも良いことは無い。なら、偽りでも彼女を安心させ、クラスメイトのところに行つてもらえばいい。

「俺は大丈夫だよ」

「本当に……ですか？」

「うん」

それは表面上　　言葉だけのやり取り。感情など入る余地もない。そう言われてしまうと雪華もどうしようもないのだろう。お辞儀をするときラスメイトのところで小走りで向かっていった。

「あ……」

「何ため息ついてるんですか？」

雪華がいなくなり、ようやく開放されたと思った想人の前に今度は小動物を連想させるような少女が飛び出してきた。

「……なにか用かい？　未夏ちゃん」

「いえっ。別に用はありませんですっ」

彼女は時雨未夏。一応高校生ではあるが、とてもそつは見えない。多分、電車とかバスを子供料金で乗れるだろう。

それぐらい小さい。

まあ、幼く見られるのはそれに加えて言動が子供っぽいというのもあるのだが。

「用が無いのに、なんで僕の前にいるんだい？」

「なんでおじょうねつ？」

「あ……」

再びため息をついた。

正直、未夏のようなタイプは苦手だ。無邪気な顔をして自分の領域に土足で踏み込み、荒らし、何食わぬ顔で笑いながら帰っていく。そのくせ自分の領域に他人を踏み込ませようとしている。

本当に苦手だ。

「悪いけど、用が無いなら一人にしてくれない？」

相手を直接的にではなく柔らかに、だが完全に拒絶する一言。

その言葉を聞いたとき未夏は恐怖とも取れる表情を一瞬だがうかべた用に見えた。

「みんな……」

「邪魔をして申し訳ありませんでしたっ！　未夏はこれにて退散しますですっ！」

そういうた彼女の表情からは、特に何も問題は無いように見えた。彼女が走り去った後、そこには静寂しかなかった。

次の授業は音楽。みんな音楽室に行つたのだろう。

それに気付いたときちょうど始業を知らせるチャイムが鳴つた。

「あ～あ。こりゃ完全に遅刻だな」

自分一人だと思つていただが、アイツは残つていたらしい。

「なんだ。待つてくれたのか？」

「まさか」

そう言いつつも、見る限りでは待つてくれていたようにしか見えない。

「素直じゃないな」

「そりやあ素直でいたらお前みたいになつちまう。そんなのは御免だからな」

それは何も知らない人が見たら嫌味を言つてゐるように聞こえたかもしけれない。

だが想人は知つてゐる。コイツ　神谷統夜はなんだかんだで他人のことを思いやれるやつだ。それを絶対に見せることは無いけれど。

「違いない」

苦笑しながらそう返す。多分、これがベストの返答。

「さつさと行こうぜ。音楽の先生は遅れるとうるさいからな」「だな」

教科書などを持ち、統夜と一緒に音楽室へと向かつ。

教室から出るときに、窓から見た空は世界は滅びへ向かつていることを忘れさせてしまうような蒼穹だった。

「さ、行け。」「

「ん、……ああ」

返事はどこかぎこちないような気がした。なんだか他の事に気をとられていたように思える。

それが少し気になつて、統夜の視線を追つてみた。

その先にあつたのはカレンダー。世界の滅びの日が示されている、忌々しいもの。

今日の日付は五月十日。

世界が滅びるまであと百十一日。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9697d/>

世界が終わる時 The last summer

2010年10月8日12時22分発行